

## 主張

### 部活動を考える

角居 恭一

初任以来、二十年近く女子バレーボール部を指導してきたが、ある面では、担任していた子どもたちよりも深いつながりがあり、指導者としての喜びも大きかった。土曜日も日曜日もなく共に汗し涙し、苦楽を共にしてきた思いは強い。三十数年経った現在でも交流が続く、昔を懐かしみ、家族ぐるみの絆で結ばれている者も多い。

新学習指導要領総則第4の2(13)に、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるように留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。」と示された。これまでも教育課程外の学校教育活動であるという認識のもと進められてきたが、今回、部活動が学校教育活動として明確に位置付けられたわけである。

運動部活動について考えると、年々競技力向上が強く叫ばれ、技量の高い者だけが目立ち大事にされる風潮は、部活動本来の意義を少し曲げてきている感じがする。体力向上とともに精神力を鍛え、人格形成に大きな役割を担ってきたことなど部活動の教育的意義は

(2)



大きい。協調性や社会性、また、責任感や主体性を育て、生涯にわたって運動を続ける基礎作りや友情を育むなど素晴らしい教育の場である。

しかし、指導者の悩みも大きく、校務が忙しく思うように指導できない、専門的な指導力がない、自分の研究や自由な時間の妨げとなっているなどの問題があり、一部に見られる活動の過熟化やそれに伴う生徒の健康面への心配、少子化に伴い部が存続できないことや指導する顧問の不足等、憂慮すべき課題が山積してきていることも事実である。

部活動は、生きる力を育てる格好の教育活動であり、楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活に寄与できる極めて効果的な活動である。

しかし、中学校の現状を思うとき、これからの時代における部活動は、学校だけに任せ置いては行き詰まるのではないかと思う。各種大会等の在り方、競技力向上への取組、指導者の不足や少子化の問題等多くの課題を解決していくために、学校現場の声を最大限尊重しながら、教育行政、学校、地域社会等関係者が一体となって、学校教育活動の一環として誰もがその価値を認める活動として、これからの望ましい中学校部活動の在り方・進め方を、模索していく必要があるように感じている。

(全日中副会長・熊本市立西原中学校長)

(3)

